

私のオアシス

福島県 桜の聖母学院小学校 五年

山村 桃花

私は赤ちゃんの時から母のベッドが大好きでした。赤ちゃんの記憶はありませんが、父と母の間に私のはさまれていて、いつもねがえりをうつつとそこには両親がいてくれました。弟が生まれると、父、私、母、弟の順、更にもう一人弟が生まれても、五人川の字になってねむる時間は、私のとても大切なものです。

母のベッドは、私が友達とケンカをした時、そっと私を包んでくれて、何がいけなかったかを静かに考えさせてくれます。悲しくて、くやしき時、母の毛ふが私の涙をぬぐってくれます。病気の時や、真冬の寒い日は、優しく私をいやしてくれます。そんな母のベッドは、いつでも私の心と体を温めてくれる「オアシス」なのです。だから私と弟は母のベッドが大好きで、だれが母のベッドでねるか、よくケンカをします。ある日、「そんなに好きなら、桃花にお母さんの毛ふをあげるよ。」と、言われました。

「やったあ。お母さんの毛ふもらえるよお。」
早速もらった毛ふをかけてねてみました。

「あれ、いつもお母さんの毛ふじゃない。ひんやり冷めたいし。かすかにしかお母さんのおいもない。何これ、変、いつもとちがうよ。」

私は下において母に、「今日毛ふ洗った。何かしたの。」と聞きました。でも、母は、

「何もしてないよ。いつもと同じだよ。」

私はもう一度自分のベッドへ行つて確かめましたが、さつきと変わらず、ひんやりしていました。母が私のベッドへ来て、「どうしちゃったのかなあ。」

母の新しい毛ふはすでに母のにおいがいっぱいでも温かくなっていました。

「やっぱりそっちの毛ふと交かんしてよ。」
「いいよ。」

母から私に移ったとたん、毛ふはひんやりしてきます。母が、

「桃花、お母さんの毛ふは魔法でも何でもないんだよ。桃花や蓮、凜がつかない時、困った時、いつでもホッとできるように、そして早く元気になれるように温めているだけなんだよ。」

いつでも私達の事を考えてくれる母は、世界一素敵な母です。今では毛ふを交かんしたいとは思わなくなりました。が、やっぱり母のベッドは私達のオアシスであり、大好きな場所です。今でも母のベッド争奪戦は続いています。私も弟も母のベッドに足を入れて、まるでこたつのようになっています。母は、

「こたつじゃないんだから。」

と、さげびますが、今日も大好きで温かい母のベッドでみんな笑顔でねむります。